

1. コンセプト

時流の変化により魅力が損なわれつつある温泉街

1950年頃から続いた川湯の温泉街開発は、**経済的発展**を目指し進められてきた。

日本社会も**発展から成熟**の時期を迎え、

観光の形態は**団体から個人**へ、目的は**消費から体験**へと移り変わっている。

発展期に建設され栄え広がった温泉街は、**一部が廃業・休業**し

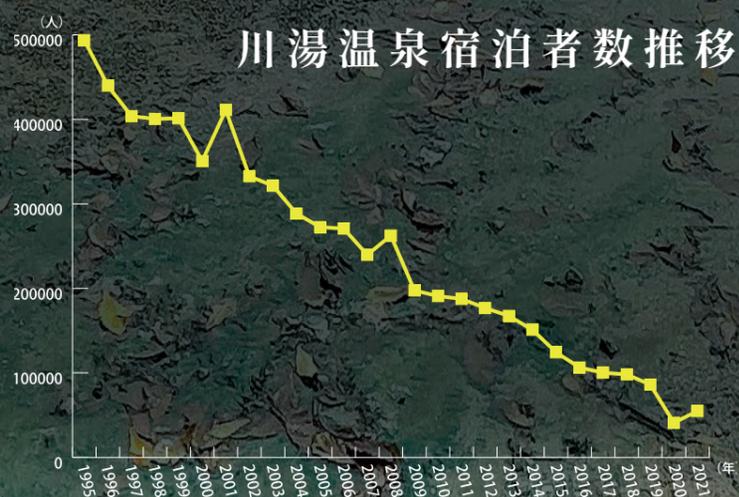
現在街に**寂しい影**を落としている。

【日本の温泉地の変容過程】

- 1945～1955年：戦後復興の中で
50年代から「行楽景気・週末の温泉特急」
男性団体客「慰安旅行の場として発展」
「**一部温泉地の歓楽街化**」
- 1956～1973年：高度経済成長をむかえて
「温泉を中心としたネオン温泉街」
「**旅館の大型化・高級化**」
「個人・小グループ化も始まる」
- 1974～1991年：バブル経済をむかえて
80年代半ば「温泉ブーム」
「団体旅行からの多様化」
1987年「総合保養地域整備法(リゾート法)」
1989年「ふるさと創生基金」
「**宿泊施設の大型化・豪華化**」
- 1992～2010年：バブル経済崩壊の中で
「団体旅行向け施設の不振」
「**旧来の温泉地の衰退**」

【過去】

- 1900年頃
開湯
- 1934年
阿寒湖国立公園設立
- 1953年
屈斜路湖周辺、映画のロケ地となり観光客増
- 1991年
年間宿泊客が560,000人となりピーク



【現在】

- 2016年
阿寒摩周国立公園が環境省による「国立公園満喫プロジェクト」において、全国の国立公園の中で先行的・集中的な取組を行う国立公園に選定される。
- 2020年
川湯温泉 旧ホテル華の湯・旧川湯プリンスホテルの撤去 → 継続的な廃ホテルの撤去
- 2019～2024年
ひがし北海道ロングトレイルの整備
- 2022～2023年
川湯地区整備計画策定

転換の好機

現在の川湯の課題点

川との接点が少ない

- 『お湯の川』に建物が背を向けてしまっている 表 ← ● 裏
- 川へのアクセスポイントが少ない ●
- 川と商業・宿泊施設などが分断されている

町の密度、空洞化と過密 ●

- 廃業したホテルや空地が多い
- 営業店舗が少なくシャッター街化している
- 駐車場が多く、市街地的な景色となっている

道路の景観

- 車道が広く、街を分断してしまっている

建物の配置と大きさ

- エリアによっては建蔽率的に過密となっている
- 一部建物が自然との景観の障壁となっている

エリアエントランスサイン ●

- 川湯温泉エリアの入口が不明瞭な為、温泉街に来たという高揚感に欠ける

歴史があり自然環境にも恵まれている、町の魅力が来訪者に伝わりづらい。



マスタープランコンセプト

「湯の川がつむぐカルデラの森の温泉街」

川湯を流れる湯の川は、硫黄山から屈斜路湖へ流れ込み地球の自然活動をダイナミックに見せると共に、川湯に良質な温泉という恵みをもたらし、120年以上に渡りこの地に住む人々の生活を育んできました。

これからの川湯温泉では、湯の川を街の主役とした表通りにすると共に、国立公園にふさわしい森に溶け込むような街づくりをする事が川湯温泉にしかない魅力を創出し、川湯に新たな人を呼び込み、交流と物語を紡ぎ出します。

開発の方向性

1. 川湯温泉の特長を際立たせる

- 川湯最大の特徴である**湯の川を中心**とした街づくり
- 国立公園内の立地にふさわしい**自然と賑わいが一体**となった街並みづくり

2. 適切なスケールの街づくり

- 観光客入込者数、宿泊施設数、商業店舗数など、数ではなく質を求める**川湯温泉エリアにふさわしい規模の街づくり**
- 建物の高さや規模など、**街が一体となった上質な景観づくり**

3. 訪れる目的を増やす

- 温泉や宿泊に加え、ロングトレイルの立ち寄りや日帰り観光など、川湯を訪れる**新たな目的を作り**総体的に集客増を図る
- 観光客の入込が落ちる冬季に、冬ならではのアクティビティや楽しみをつくり出し、**一年を通した集客を図る**
- 宿泊率の向上へと繋がるよう、日中のアクティビティや街歩きなど**滞在時間の消費拡大となる街づくりを行う**

景観ルールの方策

- 訪れる人が求める国立公園にあるべき姿、川湯らしさを「丁寧なデザイン」としてルール化する。
- 既存の住人・事業者とこれから参入する事業者が、統一の目標・意識を持ってこの街の景観を守り育てる。

目指すべき姿を維持し、街の景観が川湯の財産となる

.....1991年.....2022年.....転換期.....未来へ.....

